

「12 年度技術室運営委員会」より

12 年度技術室運営委員会委員長

古澤 保

昨年 4 月に池淵所長より住友先生の後任として技術室運営委員長を仰せつかり、技術部時代から永年技術室の顧問として種々の問題解決に努力してこられた住友先生と異なり、組織としての技術室を殆ど意識することなく利用者としての便利さのみ考えていた者にとっていささか荷が重いと感じたのが、正直なところでした。所長から与えられた課題は、「技術室発足より 4 年経過したが、未だ全所的組織として充分機能しておらず、とかくの批判も耳にするとところであり、さらに 13 年度末に 6 名もの大量の定年退職を控えており、何らかの具体的対策を考えること」でした。住友委員の議事録によると一貫して工作室問題が議論されており、技術室の中心として工作室が位置付けられているものの、具体的に進展していないため本委員会でも継続して討論すべき事項のようでした。

第一回の委員会では防災研究所の中での技術室の位置付けを明確にするため、各委員、特に教官側委員のそれぞれの立場から技術室についての意見を述べ合う中で、機器製作（開発）は技術支援の一つの柱であり、懸案となっている工作室の整備は進めていく必要が有ることが確認されました。また、研究所の中で「技術室」の問題を取り扱う所は本委員会以外にないので、技術室に関する色々の意見を取りまとめ所長をはじめ教授会等へ働きかけていくことを確認しました。

工作室について所長より場所として防災研図書室の移転に伴う跡利用が候補となり得ることが示され、同時に工作室としての利用には、機械更新が経費的に不可能なことと、床強度、騒音等の問題もあることが指摘されました。技術室側からは工作室というより実験観測準備室として機器開発の設計・図面作成、所内の計測器等を集めて観測機器の保守・点検・較正等を行うと同時に、宇治地区の技官を集結させて技術室のセンター的役割を持たせる、と言う案が提出され、委員会で検討の結果、この方向で具体化、要望していくことにしました。なお、工作室は、現在地震予知研究センターが管理している建物・機械の技術室への移管を要請して全所的利用を可能とすることにしました。幸い池淵所長の尽力により、この問題は具現化することが出来、新年度 4 月 2 日より機器開発・実験観測準備室の開設と宇治地区技官の技術室への一元化がなされ、形の上では「全所的技術支援を行う技術者集団」としての技術室の機能を発揮するために大きく前進したことになりました。技術室においては、早急に具体的運営を確立し、名実ともに技術室のセンターとして機能するようにお願いします。

しかしながらこの室がうまく機能するかどうかは支援依頼をする側にあることはいうまでもないことであり、技術室への部門・センターの積極的働きかけをお願いするものです。特に、これまで技官が居なかった部門・センターでは観測等に出られる場合でも技術室への支援依頼について全く意識されない所があるようですが、このような場合先ず技術室への支援依頼をしてみても如何でしょうか。現場での技官の方の技術・知識が間違いなく観測の効率を高めることになると思います。但し、技術室には

独立の予算がありませんので費用は支援を依頼する側の全面負担となります。予算に関してもう一つ、実験観測機器の保守、工作機械の維持管理に必要な費用を技術室予算として交通経費化することもお願いしたいことです。次期委員会には、本年度具体的方策を出せなかった技術室のもう一つの柱である情報分野についてと合わせて、この予算の問題を検討していただきたいと考えます。

技術室への希望として、技術研修会は技術室の研究所理解だけでなく、技術開発、機器開発等に力を結集し、プロジェクト方式で教官も参加した技術研究会に発展させ、防災研究所の「技術室」としてノウハウを蓄積していってもらいたいと考えます。将来ともあくまでも防災研究所の技術室であって宇治地区事務部統合のようなことにならないよう祈ります。